
家族と月におくられて

勝瀬うしよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族と月におくられて

【Nコード】

N6543L

【作者名】

勝瀬うしよ

【あらすじ】

みんな、あの優しいおじいちゃんが大好きだった

(前書き)

4度目の投稿です。

「そんなのダメだ！」

月の綺麗なある夜、若いものが異論を唱えた。

「ええんじゃよ、もう」

もうこれは、決まっていることなのだから。

「何がいいものか！ あんたどうなるかわかってるのか？」

「わかっておるよ。その上でええと言っておるんじゃ」

口は悪いが、わしのことを心配しているのがよくわかる。この子は本当にいい子に育った。

「じいさん、どうしてそんなに落ち着いていられるんだよ……」

「おじいちゃんっ」

「じーじい……」

別の子達が言った。何が起きているかはわからない子もいたが、わからないなりになにか察したのだろう。

この子も、この子も、この子も……。皆ええ子になった。

「わしは幸せものじゃ。こんなにも、皆に慕われて生きている」

「それは、じいさまが私たちに恩恵を与えてくれたからです」

「そうだぜ、俺はただ借りを作りたくないだけだ」

皆わかっている。もう、これはどうしようもないことだと。それでも、それでも皆一様に反対する。

「本当はわかっているのだろう？ もうどうにもならないことくらい。ならば、最後の夜くらい静かに過ごさせてはくれんかね？」

「でもっ……」

「じーじい」

「おおすまんすまん。そんなつもりは無かったのじゃが……。おまえたち、泣くことはないんだよ？ これは、決して不幸なことではないのだから」

そういつても、笑っているものは誰も居なかった。

「いいかい、お前たち。わしは充分に人生を全うしたのじゃよ。充分すぎるくらいに。その永い永い人生の間に、家族が増え仲間が増えた。わしはとても楽しかった。この人生に、何一つ悔いは残っていないのじゃよ」

「ウツ……ウツ……」

「俺は泣かねえからなっ」

ほんとう、いい子達ばかりじゃ……。全く、わしまで泣きそうになってくるわい。

しばらく月を眺めて、心を落ち着けた。

……わしは、良い最後を迎えられそうじゃな。こんなにも恵まれている。

「わしがいなくなったあとにもまた新しい命が芽吹き、育っていく。その手伝いがわしの余生の生きがいじゃったが、これはその最後の手伝いじゃ」

「うわあああん」

ついに、小さい子が大きい声で泣いてしまった。それにつられるように皆声をだして泣き始めた。

「わしはこの土地が大好きじゃ。鳥も、リスも、柔らかい土も、心地よい風も。だから、わしがいなくなったあとこのことをよろしく頼まれてほしい。それが、この老いぼれの最後の望みじゃ。皆、わかつたかな？」

「はいっ……わかりました……」

皆の中では、比較的年上のものが応えた。きっと、この土地を良い方向へ導いてくれるだろう。

「では、皆そろそろ休みなさい。わしも疲れた……」

「じーちゃんっ!」

「なあに、これが別れというわけではない……。わしのあとをつぐものが、また現れる……。その時に、その子をかわいがってやってくれ。おっと、また頼みごとをしてしまったな。悪いがこれも追加しといてくれないか」

月が明るかった。

「きれいな月じゃ。冥土の土産には最適じゃのう……。ばあさん、よろこんでくれるかなあ」

そういった時、急に眠気が襲ってきた。

「ではな、皆の衆。さらばだ」

段々と意識が薄れていく。月が段々と闇に覆われていく。だが、その月が消えることは決してなかった。

「ねえ、ママ」

「ん？ なあに？」

「この大きなイチヨウさんどこにいったの？」

「ああ、この大イチヨウね。この木はね、中が腐っていて、もうどうしようもなかったらしいの。それで伐採することにしたんです」

「くせ？ ばあ？」

「まだあなたには早かったわね」

「？」

「つまりね、このイチヨウさんはちょっと遠いところに行ったのよ」

「もう会えないの？」

「そうねえ。もう会えないでしょうね」

「イチヨウさんに会えないの、さみしい……」

「そうね、ママも寂しいわ。でもね、イチヨウさんは疲れちゃったの」

「つかれた？」

「そう。だから、お疲れ様って、ゆっくり休んで下さいねって。ほら、チカちゃんも言ってますよ」

「うん、わかった。」

「いちよござん、おつかねさま。ゆっくりやすんでください。」

その時、風は吹いていなかったが、確かに木々がざわめいた。

(後書き)

友達に見せたら、童話っぽいっていわれました。

そう、なんですかね？

童話っていうのがいまいちつかめない今日この頃です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6543/>

家族と月におくられて

2010年10月20日15時34分発行